

# 赤いすば 知つば 標り 標の町

第三十九弾／秘密の抜け道はどおこだ／編

秘密の虫捕り場、秘密の抜け道…。

秘密は少年たちにとって

かけがえのない宝物だった。

「ここは、絶対内緒やからな！」

それが少年たちの友情の合い言葉だった。

観光地に育った少年たちも同じ。

どんな観光名所であろうと

少年たちの目には

自分だけの秘密の〈すいば〉なのだ。



## プロフィール

藤原敏行

昭和17年生まれ。日本画家。東京・銀座のセントラル美術館で個展を開くなど精力的な創作活動を行なっている。作品には嵯峨野を扱ったものも少なくない。また、二代目宇石（うせき）として、亡き父の嵯峨面づくりを継ぐ面作家でもある。





(写真上)「タンチ(タヌキ)見に行こ」と娘さんとせがまれてよく行った信楽焼・小陶苑。「このコ昔からいたコ?」「さあ〜」



(写真下) 地藏盆になると肝だめしをやった去来の墓。今はすっかり明るくひらけている。どちらかという、去来の墓に続く道の方が恐い。

(写真上右) 二尊院の奥から秘密の抜け道があった。「竹垣が何かで、行けへんようになってるなあ…」  
(写真上左) 昔の遊び場には水飲み場が必要不可欠。喉が渇いたら友達と競ってこの湧き水を飲んでた。

「このへんは樟の木がほんまにうっそうと茂って、カブト捕りによく行ったもんやけど…」嵯峨野に生まれ育った日本画家・藤原敏行さんの小学校時代の日課は、近所の林での虫捕りから始まった。夜明け間もない時間に級友たちと待ち合せて、樹液に群がるカブトムシやクワガタを捕ってから、登校するのだ。当時、ミヤマクワガタを捕った者がその日のヒーローだった。しかし、その林も住宅の開発のため、今はほとんど残っていない。

藤原さんの住まいは嵯峨二尊院の目と鼻の先。少し足を伸ばせば、祇王寺、化野念仏寺など、京都嵯峨野を訪れる観光客にとっては、夢のような口ケーションに居を構えている。もちろん、すべて幼い頃の藤原さんのテリトリーだ。

まず足を運んだのが歌人・西行が眠る去来の墓。現在では西行の墓碑のまわりに、多くの歌碑が並んでいる。よく見ると、なんとカタカナ混じり! それもそのはず。現代の人の歌が刻まれているからである。

「昔はね、それこそ昼なお暗い林の中にあつたのに、いつの間にこんなになつたんやろうねえ。僕らが小さい頃は地藏盆の夜に、よう肝だめしをやつたもんですわ。こころへんはそら気色悪うてね」  
そんな藤原さんが、いちばん大暴れしたのは、去来の墓のすぐそばにある二尊院である。建物や庭にも随分手入れが行き届いていて、当時とは表情が変わつたものの、比較的当時の趣を残しているようだった。

「この池のほとりに木があるでしょ。あそこからぶら下つてる木つるで、ターザンごっこをしようやつたもんです。アリアリツて、池に飛び込んだりしてね。で、遊び回つて喉が乾いたら、こつちの湧き水を飲んで飲んだんですよ。でも、これやつたら、もう飲めへんな」。この夏の水不足のせいか、湧き水は申し訳程度に流れ出ているだけ。藤原さんは次のポイントに向かう。

「ここから祇王寺を通つて念仏寺に行ける抜け道があるんですよ。こつちの方に…」  
二尊院を奥まったところに進むと、茂みの向こうに抜け道らしきものが見える。しかし、どうやら竹垣で通り抜けるかのようになっているようだ。観光名所としてやむを得ないことである。仕方なく正面出口まで戻る。正面の階段は砂利と石で緩やかだ。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

二尊寺の横をすり抜けるの砂利道沿いに竹やぶがある。ここは今でも藤原さんがスケッチに訪れる場所だ。若い観光客がひっきりなしに訪れる竹やぶとは違い、むやみに人が足を踏み入れられていないことは、地面に降り積もった枯葉と、うすつら白い粉をふいたような竹の表面でわかる。この脇に流れる小川では二十年近く前までサワガニが捕れたという。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

### 分断されてしまった秘密の抜け道。しかし画家は、ひとつひとつの風景をまるで、つなぎ合わせるかのように

今日もスケッチを続ける…。思い出だけはいつまでも続くように。

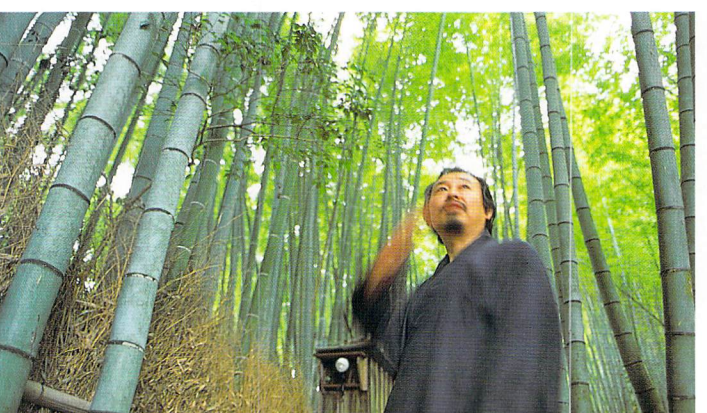
「ここから祇王寺を通つて念仏寺に行ける抜け道があるんですよ。こつちの方に…」  
二尊院を奥まったところに進むと、茂みの向こうに抜け道らしきものが見える。しかし、どうやら竹垣で通り抜けるかのようになっているようだ。観光名所としてやむを得ないことである。仕方なく正面出口まで戻る。正面の階段は砂利と石で緩やかだ。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。

「まだヨチヨチ歩きの時、手押し車をカタゴト押しながら、ここ上つていったなあ」と、一緒に歩く娘さん・綾さん。この界限は藤原さんの思い出の場所であると同時に、綾さんの思い出の場所でもあるのだ。父娘で歩いた散歩道の脳裏に記念写真よりも鮮やかによみがえる。



「手間暇を考えたなら、とても割に合はんものですよ。でも、面つくりも日本画とおなじように楽しんで取り組んでます」  
画家として、面作家として、これからは藤原さんは嵯峨野を見つめてゆく。

藤原敏行さんは、画家の顔と、もうひとつ嵯峨面作家の顔がある。嵯峨面は約七十年前に釈迦堂周辺の村人たちが作つていたものを先代が復活させたものだ。ひよつとこからお多福、天狗など、どこかユーモラスで温かみのあるこの面は、和紙を何重にも型にはり重ねて乾かし、泥絵の具で着色するものが最もいらしい。紙の面は紙質も重要なポイントとなる。現在、敏行さんは先代字石(うせき)さんの名を継いで正統嵯峨面をつくる唯一の人物だ。

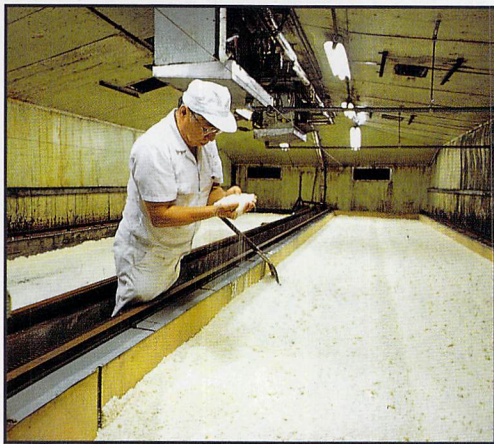
(写真左) 正面の広い道は比較的新しい私道。左側の竹垣沿いの溝のようなものが、秘密の抜け道の名残だ。昔はここを通つて二尊院から念仏寺まで通り抜けたといふ。

# 京ごり

手味噌ではありますが、  
麴づくりがちがいます。



いきなりお稲荷さんの鳥居をくぐっていく藤原さん。「確かここにも湧き水があったはずや」。しかし…。



先代がよく足を運んだというあゆ茶屋・平野屋。藤原さんは女将さんが女学生の頃からの知り合いだとか。



(写真上) 嵯峨面はすべて手作業。面つくりの地盤ともいえる反古紙の貼り込み作業は、奥さんの和子さんが支えている。「絵具を塗るところまでやってもらいたいんですけど…(笑)」と、藤原さん。

味噌づくりの工程は、昔の日本人にとっては常識だった。大豆を蒸し上げ、米や麦などの麹と塩を混ぜて熟成させる。各家ごとに微妙な味のちがいがあったというから大変なものだ、と現在の我々は思う。が、平安朝の昔でさえ、市に行かねば求められない味噌があった。それが西京白味噌のルーツだ。

素材と水の吟味もさることながら、麴づくりに手間がかかる。蔵元の技の見せどころと言えよう。慎重に水に漬け、ふつと蒸した米に種麹を植えつけ、室に敷き込む。温度と湿度の調整、送風、攪拌などなど。目に見えない微生物がたよりだから、米が米麹へと発育していく48時間は目が放せない。「時代に合った器や機械を使っている。昔ながらの伝承の味を出していくのが、私にとって巧なんです」

本田味噌の工場長である三輪さんは、毎日4回、米麹の具合を手にとって確かめる。水分の加減はどうか、麹菌はしっかりと根を張っているか、わが子のように手塩にかけていると、目をつぶついてもその頃はわかるのだという。すべてがコンピュータに管理されている現在ですら、味の決め手はやはり愛情、ということか。

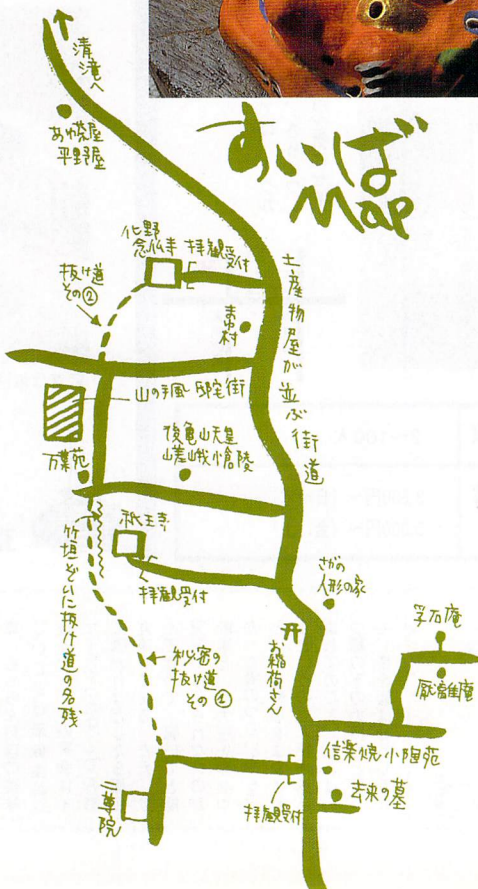
## 本田味噌本店



京都市上京区室町通一条558  
電話番号●075 (441) 1121  
営業時間●午前10時～午後6時



藤原さんの嵯峨面は嵐山・嵯峨野周辺では嵐山波近くの石川竹の店、天竜寺売店、渡月橋南の渡月亭、二尊院近くの松里で買える。イミテーションが多く出回っているので、注意。



取材 文/大塚 祐希 写真/JCOREWスタジオ



念仏寺に続く街道で思わぬ有名な人に出会う。「ボ、ボ、ボクが、なぜだかこんなところに、いるんだな」。